

14 . 人魚のはじまり (ミンダナオ)

昔、ナビという名の王がいて、彼には美しい娘がいました。王は彼女のことをたいへん愛していました。彼女がとても幼い時から、王は、娘である王女を、彼の死んだ場合には、そのあと王国を治められるように、訓練してきました。王は、良い目的を持っていたのですが、彼は娘を保護し過ぎて、彼女は18歳になるまで、彼らの豪華な館の外に出てゆくことを禁じていました。それまで、彼女は毎日、王国の法と習慣を学ぶために費やさなければならなかったのです。

しかし、王の娘は、悲しくひとりぼっちなので、王家の館の高い壁から出て、外の世界を探検し、普通の人々と会うことのできる日を、心待ちにしていました。

王は、娘が不幸せであることに気づき、ある日、彼は娘を館の外へ短い散歩に連れて行きました。王女は、王と一緒に王国の平原や谷を歩いてきたことで、たいへん幸せを感じました。初めて、娘は自然の中の花、鳥、動物の真の美しさを見ました。草は緑で、花は明るく匂い、鳥は、彼女が今までに聴いたものより美しい歌を歌っていました。

夜が始まると、王と娘は、「調和の山」に登りました。そこでは、王国の眺めに、王女はわくわくしました。彼女はそこに一日居るつもりでした。彼女の生涯では、初めてのことでした。王女は、星が空できらめくのを見て、それらは、ダイヤモンドだと思いました。彼女は、気持ちを掻き立てられて、その光るダイヤモンドを追跡して、それを掴まえようとしていました。しかし、彼女が追跡すればするほど、それらは遠のいたのでした。

娘が星を追っかけている間に、疲れた王は居眠りをして、王女が王を後に残して、山の頂上に向かって走っていることには気づきませんでした。王女が山の頂上に着いた時、彼女は向こうの海を見ました。そして、若い男が浜辺を歩いているのを見ました。彼は、彼女がそれまでに会った男たちのなかで、一番ハンサムでした。しかし、そのフィリピンの神話と伝説 14 . 人魚のはじまり

の男が彼女に会う前に、彼女は、心配した父である王に呼ばれました。

王女が父と館へ帰った時、彼女は浜辺にいたハンサムな若い男のことを考えるのをやめませんでした。彼女は昼間は彼のことを考え、夜は彼のことを夢に見ていました。しかし、彼女は、もう二度と彼に会えないと思うと、悲しくなりました。いろんな機会に、王女は父に、もう一度、調和の山に、引き返して行けないか、頼んだのですが、しかし、いつも王の答えは、同じで、「18歳の誕生日まではダメだ。」でした。

何年か過ぎて、美しい王女は、18歳になる日を指折り数えていました。その日が来たら、彼女は館から出ることが許されるのです。そして、ついにその日が来ました。彼女の父や館の関係者と共に18歳の誕生日を祝った後、興奮している王女は、もう一度あのハンサムな若者に会うために、館を出て、調和の山に行くのを待ちきれませんでした。

しかし、王女が館の門を通ろうと準備している時、王は彼女に警告の言葉を告げました。「お前は空に、第七の月が現れる前に、館に帰って来なければならない。」と王は言いました。「そうしないと、たいへん悪いことが起こる。」と言いました。王女は、王の言葉を尊重して、その警告に従い、第七の月のあがる前に、館に帰って来る、と言いました。そして、王女は父に口づけして、わくわくしながら大きな門を通り、館の敷地から出て行きました。

幸せな王女は、山の頂上に着き、その向こうの海を見たら、びっくりしたことに、浜辺に沿って歩いているハンサムな若い男がいました。しかし、どうしたことが、彼はたいへん悲しそうでした。

心配そうな王女は、海へ降りて行って、浜辺へ泳いで行き、悲しそうな若い男に近づきました。若い男は王女に会えて、たいへん幸せでした。しかし、彼は記憶を失って、家へ帰る道を思い出せないで、悲しんでいることを告げました。王女は、その若い男をかわいそうに思い、彼の家へ帰

る道を探すのを手伝う、と言いました。

そして、王女とハンサムな若い男は、彼の家を見つける旅に出ました。昼間は丘や山を越えて歩き、木から実を取って食べる時と、小川から水を飲む時だけ、立ち止まりました。夜は、彼らは木の下で眠り、暖かさを保つために抱き合って寝ました。だんだんと時間が経つにつれて、王女とハンサムな若い男は、ますます愛し合うようになりました。事実、王女は深く愛していたので、彼女は、父が彼女に与えた時間と警告を全く忘れていました。

ある夜、王女とハンサムな若い男は、小さな流れから水を飲んでいましたが、彼らは遠くに明るくキラキラひかる光を見ました。彼らが光へ向かって歩いていると、若い男は、それが彼の家だったことを思い出しました。彼はたいへんうれしくなり、一緒にいる王女と、走りに走りました。そして、家のある村に来て、ほっとした両親が待っていました。彼は、母と父と抱き合い、抱擁し、彼らに王女を紹介し、彼女がいなかったら、家を見つけることができなかつたら、ということを知らせました。ハンサムな男の両親は、息子と王女が愛し合い、若い恋人が結婚することを祝福してくれるよう頼んだ時、反論はしませんでした。ただ、その男の両親が、王女に彼女がどこから来て、母と父はどこにいるのか、問われた時、彼女は家から多くの日々、夜々、離れていたことを悟りました。彼女は結婚式をその日に行なって、彼らがすぐに、調和の山への旅を始め、第七の月の上がる前に、帰れるように頼みました。王女とハンサムの若い男は結婚するやいなや、彼らはすぐに調和の山に向かって旅に出て、若い男の両親が用意してくれた食べ物と水を携えていました。彼らはできるだけ急ぎました。第七の月の夜が近づいていて、時間がなくなってきた、走りだしました。

ついに王女と新しい夫は浜辺に着きました。暗くなって、太陽は調和の山のかげに落ちようとしていました。彼らは海に飛び込んで、山に向かって、急いで泳ぎました。空で、月が太陽の位置にフィリピンの神話と伝説 14 . 人魚のはじまり

着く前に山に着くように、王女が泳ぐのに従って、彼女の心臓は、どんどん強く打ちました。

ついに息切れした王女と新しい夫は、調和の山に着いて、水からふらつきながら出て、地面に座り込みました。しかし、それは遅すぎました。そこはすぐに暗くなり、第七の月が空に高く上がっていました。王女はぞっとして、そして新しい夫を強く抱きしめました。「心配しないで。」新しい夫は、彼女を強く抱きしめて、断言しました。「僕は君に何も起こさせはしないよ。」

しかし、ハンサムな若い男は、神々の力に対しては、無力でした。そして、彼の妻を助けることはできませんでした。彼女は体の低い所が巻きついて、ねじれるのを感じました。彼女の体の低い所に、鋭い痛みの一撃があり、彼女は叫びました。彼女の夫は、彼女を離しました。そして、彼女は地に倒れました。彼が恐れながら見ると、彼の妻の胴の低い所の一部は、魚の鱗のようになりかけていました。ふたつの足はひとつになっていて、長い鱗の尻尾で、最後は、ばたばた動き、ヒレがついていました。美しい王女は、半分女性、半分魚の生き物になっていたのです。

その若い男は、立ってその場で凍りついていました。そして、その変化を理解することはできませんでした。彼の美しい妻が、美しい人魚に変るなんて。人魚になった王女は、たいへん恥ずかしくて、鳴き声を出して、海に飛び込みました。彼女の夫は止めようとしたが、人魚は波の下へ消えてしまい、彼は何もできなかったのです。彼は彼女を呼びましたが、答えはありませんでした。人魚は、もうずっと海へ消えてしまいました。

何年も、毎日ハンサムな若い男は、船を海に出して、愛する王女を探しました。彼は彼女の名前を呼びました。しかし、二度と彼女を見ることはありませんでした。彼は失意の孤独な老人として死にました。

一部の人は、特に風が吹く日には、ハンサムな若い男の霊が、海で彼の王女を呼んでいるのが聞こえるだろう、と言います。また、ある人たちは、波の中に泳いでいる人魚が見えるかも知れ

ない、と言います。しかし、誰かが近づいて来るのを知ると、彼女は海の下にもぐってしまいます。恥ずかしくて、彼女の姿を現せない、と言うのです。